

JUGEND PHIL.

ユ  
ー  
ゲ  
ン  
ト  
・  
フ  
ィ  
ル  
ハ  
ー  
モ  
ニ  
カ  
ー

特  
別  
演  
奏  
会

2021.8.1 (日) 14:00 杉並公会堂 大ホール

## ごあいさつ

本日は、ユーгент・フィルハーモニー 特別演奏会にご来場くださりまして、誠にありがとうございます。

待ちに待ったオリンピックが開催されましたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により全面的な無観客開催を余儀なくされました。当初想定していたような活気に溢れた「東京 2020」とは違った雰囲気のもと競技が実施されています。

クラシック音楽界においても、海外のアーティストの来日困難による演奏会の中止など、引き続き深刻な影響を受けているのはご来場の皆様も御存知の通りかと思えます。中でもとりわけ深刻な影響が続いているのは、高校・大学などに属する「学生オーケストラ」の皆さんです。特に、2020 年度に入学を迎え、今年から来年にかけて活動の中心を担うであろう 2、3 年生の皆さんは奇しくも「コロナ世代」と呼ばれるように、入学直後から活動休止期間や演奏会の中止などに直面し、非常に困難な状況下での活動を強いられています。今年度 3 年生になるにも関わらず、大学オーケストラの演奏会には 1 度しか出演できていない、という学生さんの声も伺いました。

全国の高校・大学オケの OB/OG を母体とするユーгент・フィルとして、困難な時代の活動の一助になりたいという思いから、今回の演奏会に先駆けて「高校生のための公開リハーサル」を実施いたしました。アマチュア・オケとしてどのように

演奏会に向けた作り込みを実施しているのかを間近で体験していただき、また学生の皆さんから寄せられた Q&A にも実演を交えつつお答えしました。本日の演奏会本編にも、多数の学生の皆様にご来場いただいております。本日の公開リハーサルと演奏会が、若い世代の豊かな音楽活動の実現にとって、少しでも益するものになればと願っております。

さて本日は、当団音楽監督の安斎拓志の指揮により、グリンカの《ルスランとリュドミラ》序曲、シューベルトの交響曲第 7 番《未完成》、そしてドヴォルザークの交響曲第 9 番《新世界より》という、まさにクラシックの王道を行くプログラムをお届けいたします。定番曲に改めて向き合う時間は新しい発見に満ちており、団員一同気持ちを新たにして鋭意練習に取り組んでまいりました。どうかお楽しみいただければ幸いです。

最後に、本演奏会の開催にあたりご協力いただきました数多くの皆様、そしてご来場いただきました皆様に、改めて心より御礼を申し上げます。

ユージェント・フィルハーモニカー 代表 湯田 怜央奈

# プログラム

M. グリンカ：

歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲（約5分）

F. シューベルト：

交響曲第7番 口短調 D.759《未完成》（約24分）

— 休憩 20分 —

A. ドヴォルザーク：

交響曲第9番 ホ短調 Op.95《新世界より》（約46分）

（終演 16:00 頃）

---

指揮 = 安斎拓志

---

演奏中にスマートフォン等でパンフレットをご覧いただけますが、音が出ないように設定の上、画面を暗くするなど周りの方への配慮をお願いいたします。

## 指揮 安齋拓志

福島県出身。3歳よりピアノを故大内洋子氏に師事。福島高校管弦楽団でヴァイオリンを担当し、これまでにNHK交響楽団の木全利行、篠崎史紀の両氏らに師事。全日本高等学校選抜オーケストラのオーストリア公演に3年連続で参加。立教大学交響楽団においてコンサートマスターを務める傍ら、故佐藤功太郎氏の薦めで指揮を始める。卒業後は桐朋学園大学、国内外のセミナーにおいて学ぶ。



これまでに指揮を故佐藤功太郎、河地良智、湯浅勇治の各氏らに師事、これまでに数多くの演奏会の副指揮者・客演指揮者を務める。2006年にユーгент・フィルハーモニカーを創設、農村でのオーケストラ演奏会を指揮するなど意欲的に活動し、それらの音楽活動が読売新聞全国版に度々取り上げられる。2012・2013年には国立競技場においてアイドルグループ嵐のコンサート「アラフェス」のオーケストラと合唱を指揮するなど、クラシックの枠にとらわれない様々な活動を展開している。

現在ユーгент・フィルハーモニカー音楽監督。2017年からは全日本高等学校オーケストラ連盟の高校オーケストラ支援事業を担当、数多くの音楽事業をオーガナイズし青少年の音楽教育にも力を入れている。

## ユーゲント・フィルハーモニー

一般財団法人日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユンゲオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設された。全国各地の高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≡プロオケには出来ないこと）」を追求している。



©Ryosuke

## 曲紹介

先月から再び緊急事態宣言が発令された。演者も聴衆も一堂に会することが前提であるオーケストラ団体は、去年からずっと、先行きの見えない中で活動を続けている。

しかし一方では思い出す…かつて作曲家たちは、コロナ以前の東京ほど恵まれた音楽環境に居たわけでは無いことを。

### **M. グリンカ(1804 - 1857)：歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲**

---

ロシア音楽史の文脈において、グリンカは「音楽の父」とたびたび称される。逆に言えば、当時のロシアは音楽的に不毛の地であった。音楽家を志望したグリンカだったが、音楽家は職業として認められていなかったため、渋々役所勤めを始めた。とはいえ、当時の貴族階級にとって役所勤めは名誉職に近く、実務としてはそれほど多忙でなかったため、グリンカは仕事と並行して作曲を行う余裕があった。しばらくはドイツやイタリアの作曲家に影響を受けた作品を発表していたが、次第にロシア人としての自覚が芽生え、「ロシア的な音楽作品」を希求するようになる。その結実の一つが1842年に完成したオペラ『ルスランとリュドミラ』である。ロシア貴族の前で行われた初演は、まずまずの成功をおさめた。

曲は伝統的なソナタ形式であるものの、開始早々の急速なパッセージ、第1主題

から第 2 主題への転調、華麗で効果的な楽器の使い方など、斬新なアイデアが各所に散りばめられている。

特に冒頭の全弦楽器による総ユニゾン、チャイコフスキーやショスタコーヴィチなど、後世のロシア人作曲家たちにも模倣され、オーケストラを盛大に鳴らす際の常套手段となった。グリンカはこの序曲によって、オペラの第一幕だけでなく、ロシア音楽史の序幕をも開いたのである。

## **F. シューベルト(1797 - 1828)：交響曲第 7 番 口短調 D.759 《未完成》**

---

シューベルトは、音楽の都ウィーンで生まれ、いわゆる「ウィーン少年合唱団」で音楽を学ぶという、極めて恵まれた音楽環境の中で育った。作曲においては速筆で多作、その才能の豊かさは友人の誰もが認めるところであった。

しかし彼にとって不幸だったのは、当時のウィーンにおける「働き方改革」である。音楽家は、宮廷や教会に仕える「勤め人」から、自分でパトロンを探す「フリーランス」へと、その職業形態を変えていた。シューベルトは元来内気な性格で、出版社やブルジョワ階級等の有力者へ売り込む事が苦手だった。友人達の助力で何とか日々の糧を得ていたものの、貧しいまま 31 歳という若さでこの世を去ってしまった。

交響曲『未完成』は 1822 年、シューベルトが 25 歳の時に書かれた作品である。グラーツ楽友協会の名誉会員となったシューベルトは、その返礼として交響曲を作曲した。しかし曲は 2 楽章までしか完成しておらず、続きも作曲されないまま 6 年



後シューベルトは亡くなり、初演されることもないまま埋もれてしまった。再発見されたのは作曲から 43 年後の 1865 年である。

### 第 1 楽章：Allegro moderato

ソナタ形式。楽章全体を貫く 3 つの音「B♭ - C♯ - D」が示され、すぐに提示部に入り、第 1 主題と第 2 主題が奏でられる。展開部では減七の和音と管楽器の付点リズムで躍動感を伴いながら盛り上がりを示し、再現部に至る。冒頭に示された 3 つの音が用いられて、劇的に終結する。

### 第 2 楽章：Andante con moto

「天国的な」と形容される、穏やかな曲調。ホルンとファゴットの和音に導かれ、弦楽器が主題を提示する。平易なメロディーが、シューベルト独特の和声により彩られる。

## **A. ドヴォルザーク(1841 - 1904)：交響曲第 9 番 ホ短調 Op.95 《新世界より》**

---

グリンカほど音楽に無理解な時代に生まれた訳でなく、またシューベルトほど世渡りが下手でもなかったが、それ故の苦悩を背負ったのがドヴォルザークである。10 代からオーケストラでヴィオラ奏者を務める傍ら作曲活動を続け、20 代にプラハ中で、30 代にチェコ中で、40 代にヨーロッパ中で、そして 50 代に世界中で、彼の作品は評判となり、作曲家としての評価は年を追うごとに高まっていった。しかしその国際的名声は、チェコ人作曲家としては苦しみ以外の何者でもない。

「チェコの音楽を取り入れたままで、世界中に認められる作品が書けるのだろうか？」

「とはいえ、他国の音楽を模倣しても、それは猿真似に過ぎないのでないか？そもそも、曲としてまとまるのだろうか？」

本作品は、そうした「内国性」と「国際性」の狭間で揺れ続けた52歳のドヴォルザークが、葛藤を乗り越えて到達した円熟の境地である。先輩であるブラームスの作品や、黒人霊歌や、チェコの民族音楽などの要素が、作曲の過程で昇華され、万人を納得させる性質を帯びている。前人未到の作曲技術、まさに「新世界」からの芸術作品だ。

1893年のアメリカでの初演は大成功で、ニューヨーク新聞紙上ではそのモチーフの出典について議論がなされる程、話題になった。

### 第1楽章：Adagio - Allegro molto

重々しい序奏に続き、分散和音を基調とした主題が支配的に打ち鳴らされる。

### 第2楽章：Largo

金管楽器のコラールに続き、イングリッシュ・ホルンが憂愁を帯びた旋律を奏でる。

中間部では他にも魅力的な旋律が、惜しげもなく次々と投入される。

### 第3楽章：Scherzo. Molto vivace

軽快な舞曲風の主題が、長調と短調を行き来しながら展開される。

#### 第4楽章：Allegro con fuoco

単純ながらも力強い旋律が楽章全体で提示され続け、最終的にホ長調に転調し劇的に終曲する。

現代は気軽に音楽体験ができる時代だが、それ故に、その有り難みや尊さを、つい忘れてしまう。

本日演奏される3作品は、いずれもオーケストラの定番レパートリーである。震災や感染症といった困難に怯むことなく、15年以上歩みを続けてきたユーゲント・フィルハーモニカーならば、これら名作を身近で聴けることの有り難みや尊さを、改めて来場者に示してくれることだろう。

近藤圭（元団員・思想家）